

日本英語学会第28回大会発表要旨

〈研究発表〉

第一室 (11月13日午後)

司会 竹沢幸一 (筑波大学)

「文断片における格変化と統語 — 意味の インターフェイス」

永次健人 (九州大学大学院)

「文断片」(Sentence Fragments) に見られる格現象について、削除分析とは異なる独自の提案を行う。文断片とは、“Who watered the flower?” という問いに対する “Me.” のような、形式的には文に満たないが文に相当する意味を持つ表現である。生成文法の標準的アプローチでは、文断片は削除現象の一つであると見なされてきた。しかし、削除分析には文断片の格形態を説明できないなど多くの経験的問題がある。

本発表では、文断片は文の統語構造を持たないとする直接生成分析を採用し、Culicover and Jackendoff (2005 [1]) の文断片へのアプローチに基づき、文断片への独自の分析案を提示する。この分析では、英語の格形態だけでなく、ドイツ語・フランス語の文断片の格形態も統一的に説明することが可能になる。

[1] Culicover, P. W. and R. Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*. OUP.

「英語における二重着点現象」

高草雄士 (自由ヶ丘学園高校)

英語における移動表現は、これまで様々な研究者から注目を浴びてきた。その中の二重着点現象に関しては、Gruber(1976 [1])が John ran into the room to the blackboard. / *John entered the room to the blackboard. の違いを示したのをはじめとして、興味深いデータが数多く例示されてきている。このような流れを見ていくと、Tenny (1994 [2])が単一事象限定の制約で言及しているように、二重着点現象は基本的に容認されないものとして扱われてき

たように見受けられる。ところが、インターネットで調べてみると、enter においてさえも、二重着点現象と思われる例が少なからずあった。本発表では、インターネット上で見つけた二重着点現象を例示するとともに、どのような条件のときに二重着点現象が成立するのかということ、enter を中心に検討していく。

[1] *Lexical Structures in Syntax and Semantics*

[2] *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*

「統語的複合動詞構文の格と移動」

岸本秀樹 (神戸大学)

日本語の統語的複合動詞構文は、上昇タイプとコントロールタイプに分かれる (Shibatani 1973 [1], 久野 1983 [2])。さらに、影山(1993 [3])においては、コントロール動詞 (後部動詞) の中に、受身が可能なものとそうでないものに分かれることが観察されている。影山は、後部動詞の受身化の可能性に関して、受身の主語が相対化最小性に違反せずに受身の主語の位置に移動ができるかどうかによって決まると論じている。しかしながら、本論では、統語的な名詞化構文や状態動詞構文などの事実をもとに、受身化の可能性が、移動の制約によって決まるのではなく、格の理由により決まることを示す。そして、コントロール動詞に対して受身の操作が可能になるには、コントロール動詞が本動詞の格素性を引き継ぐ必要があることを論じる。

[1] “Where morphology and syntax clash: A case in Japanese aspectual verbs.”

[2] 『新日本文法研究』 [3] 『文法と語形成』

第二室 (11月13日午後)

司会 太田 聡 (山口大学)

「所格論的事象構造と被動・達成目的語」

江連和章 (神奈川県立外語短期大学)

意味の基盤を物理空間のそれに置く所格論的(localistic)アプローチは、多くの意味理論で取り入れられているが、その程度は様々である。本発表では、(使役事象の下位を成す)変化事象について、所格論的視点を強く反映させた事象構造を提示する。ordinary Path と distributive Path の区別 (cf. Jackendoff 1990, 1996) と、意味役割の結合 (cf. Ramchand 2008 [1]) を基に、(1) Theme の次元数と、(2) Theme と Path の結合の有無に関する二つの選択肢を事象構造に組み込むことで、位置変化、状態変化、出現・消滅変化を主とする変化事象全般を画一的に記述することが可能であると論じる。続いて、具体的事例分析として、英語の被動(affectum)・達成(effectum)両目的語 (cf. Fillmore 1968) とその交替 (e.g. dig the ground/a hole) について、焦点化の相違を基に、結果構文との整合性等の経験的事実も含め考察する。最後に、日英語の異同について触れる。

[1] *Verb Meaning and the Lexicon: A First-Phase Syntax*, Cambridge.

「アメリカ英語における[t]/[d]削除の最大労力と OCP 原則による分析」

西原哲雄 (宮城教育大学)

アメリカ英語において見られる典型的な子音脱落である[t]/[d]削除([t]/[d]-deletion)において、この脱落は、語の形態素構造などによって脱落率が異なる。このような文法的条件に基づく説明のほか、[t]/[d]の機能負担量という観点からも説明された。Guy (1991[1])によれば、このような説明は、[t]/[d]削除の現象を単純に述べているにすぎないとして、語彙音韻論 (Lexical Phonology) と自らの変異理論を結び付けて、変異語彙音韻論 (Variable Lexical Phonology) なるものを提唱して、説明を試みている。しかしながら、この理論では、その適用率の設定や循環的な変

更規則の適用については、その動機付けについて問題が残ると言わざるを得ない。そこで、本発表では、Borowsky (1989[2])で提唱されている Melody Integrity(MI)や OCP 原則及び、音律音韻論の音律範疇である音韻語 (Phonological Word)の構造の違いというものを援用してよりの確な説明を目指す。

[1] “Explanation in Variable Phonology.” *LVC3,CUP*,[2]”Structure Preservation and the Syllable Coda in English.” *NLLT*7.

「視覚化および数値化を用いた英語リズムの分析について」

服部範子 (三重大学)

ラボフやトラッドキルに代表される変異研究は、英語の音声変異 (variation)を対象として進展し、それまで周辺の言語事象として扱われてきた言語音声の多様性に光をあて、変異も構造をなすことを明らかにしてきた。その功績は大きいものの、微妙な音声差異の記述は母語話者でないと実感として受け止めにくい点があり、英語の変異研究は日本ではなじみが薄いと云わざるを得ない。本発表では、この難点を乗り越える試みの一つとして、視覚化と数値化を用いた英語音声の分析を提案する。具体的には、英語のリズムに関する音声情報を視覚化・数値化することによって、(1) 非英語母語話者にも理解しやすい形で英語リズムの特徴を提示するという教育的側面からの検討と(2) 配列間変動指標 (PVI, Pairwise Variability Index) (Ramus, Nespors and Mehler (1999[1]))を利用して、リズムの構築要因に関する理論的再検討を行う。

[1] “Correlates of Linguistic Rhythm in the Speech Signal,” *Cognition* 72. 1-28.

第三室 (11月13日午後)

司会 鍋島弘治朗 (関西大学)

「擬声語動詞の意味拡張におけるメタファー的特性」

井上加寿子 (関西国際大学)

動物が発するある特定の音声を表す音放出動詞 (sound-emission verbs) が、人間の行為や

様態を表すのに比喩的に用いられることは日常の言語使用の場においてしばしばみられる。例えば、“Don’t snarl at me!” (Kövecses 2000: 21[1]) においては、「(動物が) ウウツとうなる」ことを表す音放出動詞 *snarl* が、「(ヒトが) どなる」という(怒り)に関連する行為を表すのに用いられている。

本発表では、こうした動物の鳴き声に関する音放出動詞、すなわち、擬声語動詞が、人間の行為、とりわけ発話と関連が深い比喩義へと拡張することに着目し、その拡張過程について具体例に基づき考察を行う。そして、これらの擬声語動詞の拡張用法は、動物と人間の発する音声上の類似性に基づき、メタファーとメトニミーの連続性の中に複雑に位置するものであることを主張する。

[1] *Metaphor and Emotion*, Cambridge UP.

「英語類義語におけるメタファー表現への選好」

鈴木幸平 (神戸大学)

Lakoff (1993[1]) をはじめとする「概念メタファー理論」は、メタファーを「起点領域から着点領域への写像関係」と定義する。また、メタファー表現として用いることができない例については、写像に制約をかけることで考察を行ってきた。一方で、「{怒り/*激怒}が噴き出した」のように、「同じ写像に関わる語 (=類義語) でも、メタファーと共起する際に振る舞いが異なる」現象が見られる。しかし、こうした現象については、<喜び> を対象とした Stefanowitsch (2004[2]) の研究を除いてほとんど研究がなされていない。本研究ではコーパスを用いて、<怒り> に含まれる概念を表す類義語である、*anger*, *rage*, *fury*, *wrath* と共起する比喩表現を比較し、1) メタファーの記述には写像だけでなく、語の間の共起の強度を考慮する必要があること、2) <怒り> の類義語の中で、*anger* が基本的な感情語であることを主張する。

[1] “The contemporary theory of metaphor” In Ortony. *Metaphor & Thought*. Cambridge.
[2] “HAPPINESS in E. & G” In Achard & Kemmer. *Lang., Culture, and Mind*. CSLI.

「多義パターンとしての UC 問題」

瀬戸賢一 (大阪市立大学)

UC の区別は、冠詞の問題と並んで難しい問題である。この(文法的)区別がほとんど意識にのぼらない日本人にとってはとりわけそうである。これまでの内外の研究は、名詞の性質、コロケーション、認知論、語用論、文化論などの視角から、いくつかの重要な一般化の試みがなされてきたが、これを語の多義の問題として捉えようとする試みは、やや希薄であったのではなかろうか。名詞の語義の切り分けは、しばしば UC の認定と結びついていて、何をもってひとつの語義とするかの判断に UC の区別は重要な影響を及ぼす。しかし、現実には、辞書における名詞の語義記述はしばしば不安定であり、UC の記述そのものにもしばしば揺れが見られる。本発表では、多義記述がいかに関の判定と密接に関係しているのかを具体例に沿って明らかにし、その主要パターンを提示したい。

瀬戸賢一 (編) 2007. 『英語多義ネットワーク辞典』小学館。

第四室 (11月13日午後)

司会 藤井洋子 (日本女子大学)

“Finding (Sub)cultural Knowledge in Discourse: The Case of a ‘Racially-mixed’ Japanese/New Zealander” (E)

Masataka Yamaguchi (University of Otago)

The aim of this paper is to explore the consequences of the two directions of indexicality, presupposing and entailing, in communicative behavior [1] in order to reconsider the hypothesis of the ‘division of linguistic labor’ [2]. In so doing, I provide argument against anti-cognitivism by emphasizing the ‘presupposing’ directions of indexicality. Empirical evidence is taken from my interviews with a ‘racially-mixed’ Japanese/New Zealander. Analytical focus is placed on ‘poetic’ structures as repetition and parallelism in discourse. Specifically, in the interview discourse, the categories of ‘Maori,’ ‘Pacific Islander’ and ‘Indian’ are presupposed, while the activities of the New Zealand Army are represented by

presupposing the concept of ‘peace keeping.’ I argue that the interactants need to have a ‘shared’ understanding of these concepts against the backdrop of cultural knowledge, which forms the basis of coherent discourse.

[1] Silverstein, M. (2007) “How Knowledge Begets Communication Begets Knowledge: Textuality and Contextuality in Knowing and Learning.” *Intercultural Communication Review* 5: 31-60. [2] Putnam, H. (1975) “The Meaning of ‘Meaning.’” In *Philosophical Papers, Vol.2: Mind, Language, and Reality*, pp. 215-271. New York: Cambridge University Press.

“Honorification and Linguistic Ideologies” (E)

Makiko Takekuro (Waseda University)

In this paper, I first examine how a reformulation of the linguistic ideology of Japanese honorifics has become a focal point for a broad-ranging process of institutional restructuring in contemporary Japan. I demonstrate that a shift in honorification terminology from *keigo* ‘honorifics’ to *keii-hyougen* ‘expressions of respect’ indexes a more general change in language use, perceived to be necessary for a transformation of institutional system based on hierarchy to one based on efficiency and performance. I point out an ideological shift of honorification in various institutions and their prescriptions. Then I examine a series of honorific usage and demonstrate that depending on the contexts in which people use them, honorifics signify hierarchy on the one hand, and solidarity on the other.

「日本及びNZのビジネスミーティングにみられるユーモアに関する実証的研究」

村田和代 (龍谷大学)

ポライトネス研究は、近年、より談話志向へと移り変わってきた(e.g., Holmes and Stubbe (2003 [1])). また、自然談話の観察に基づいて言語行動の特徴を抽出し、談話参加者が構成員となる社会集団に共有される文化的制約や規範まで視野に入れて研究を行うことが必要だという立場も出てきた(Hanks et al. (2009 [2])). 本発表は、こういった流れの中で、日本

とニュージーランドで実際に行われたビジネスミーティングにみられるユーモアを、発言者とタイプに焦点をあてて考察する。発表では実例を提示しながら詳しく分析を行うが、分析を通して、(1)配慮言語行動の表出は、談話レベルで考察してはじめてその有様をとらえることが可能となる、(2)従来話者の個人的自由意思で選択されてきたとされる談話ストラテジーにも、談話参加者が共有する社会文化的制約や規範が働いている、という点を主張したい。

[1] *Power and Politeness in the Workplace*, Longman. [2] “Toward an Emancipatory Pragmatics,” *Journal of Pragmatics* 41-1.

第五室 (11月13日午後)

司会 縄田裕幸 (島根大学)

「英語史における名詞句と格認可の変化について」

柳 朋宏 (中部大学)

古英語では、二重目的語構文における間接目的語や形容詞の目的語に与格名詞句が用いられていた。しかしながら、同じ与格目的語であっても、格語尾の消失後、形容詞の目的語は前置詞を伴うようになったのに対し、二重目的語構文における間接目的語は前置詞の使用を拒み、現代英語においても前置詞を伴わない。本発表では、こうした違いは Woolford (2006) における「内在格」と「語彙格」の違いに起因すると論じ、Woolford が提案する3種類の格による名詞句の認可方法を援用し、次の2点を主張する。(1) 二重目的語構文における間接目的語は、古英語では機能範疇 ν によって内在格が付与されていたが、格語尾の消失後は、機能範疇 ν の機能変化に伴い、構造格が付与されるようになった。(2) 形容詞の与格目的語は、古英語では語彙範疇Aによって語彙格が付与されていたが、格語尾の消失後、語彙範疇Aの格付与能力が消失したため、新たな格付与子として前置詞が導入された。

Woolford, E. (2006) “Lexical Case, Inherent Case, and Argument Structure,” *LI* 37, 111-130. /

Denison, D. (1993) *English Historical Syntax*. Longman.

「知覚動詞 see の軽動詞用法について」

久米祐介 (名古屋大学大学院)

現代英語には、知覚動詞 *see* が無生物主語を選択する事例がある。Onoe and Suzuki (2002[1])は時間や場所の無生物主語を伴う *see* はイベントの発生や存在を示すのに対して、その他の無生物主語を伴う *see* は使役的に解釈されることがあると述べている。本発表では、歴史コーパスから得られたデータを分析することによって、存在と使役の解釈の違いは主語の違いだけでなく、補部構造の違いにも関係していると主張する。具体的には、時間や場所の無生物主語を選択する *see* は Asp を含む補部節を取り、存在の解釈を持つものに対して、その他の無生物主語を選択する *see* は Asp を含まない VP 補部をとり、使役の解釈を持つことを提案する。さらに、知覚動詞 *see* の文法化という観点から、存在と使役の解釈が生じる過程についても議論し、無生物主語を選択する *see* は本動詞と助動詞の間に位置する軽動詞であると結論付ける。

[1]Onoe, and Suzuki (2002) "Semantically Light *See*," *JELS* 19. [2]Gelderen, (2004) *Grammaticalization as Economy*, John Benjamins.

「Convince に続く不定詞構文の拡大

— 通史的な視点から —

家入葉子 (京都大学)

近年の研究動向の一つに、現代英語研究と英語史研究の接近がある。たとえば語法研究に英語史的な枠組みが適用される一方で、英語史研究においても語法研究の影響が顕著で、構文の発達を、語彙を基点に論じる方法論が確立しつつある。Römer (2005 [1])は、これとの関連で、empty slot としての文法ではなく、lexis への配慮が求められていると指摘する。本発表では、このような研究動向を踏まえ、convince の補文構造の変化を分析する。convince が近年、We are trying to convince our brothers to adopt methods that can be understood...(Time, 1974)のように不定詞を従えるよう

になってきていることはよく知られているが、これを計量的に分析した研究は少ない。そこで本発表では、20 世紀の米語を中心に、convince の不定詞構文の拡大の様子を記述し、英語の構文の発達の枠組みの中で議論する。

[1] "Shifting Foci in Language Description and Instruction," *Arbeiten aus Anglistik und Amerikanistik* 30, 127-142.

第六室 (11月14日午前)

司会 奥野忠徳 (弘前大学)

「定性効果と譲渡不可能所有」

小深田祐子 (高崎健康福祉大学)

本発表は、意味・語用論的な観点から日英語の所有構文の定性効果(Definiteness Effect)を考察対象とする。先行研究の多くは、「定性効果とは、目的語名詞句に関係名詞(relational noun)が用いられ、譲渡不可能所有(inalienable possession)という概念が表わされる場合に観察される現象だ」とする(Pardee (1999[1])など)。本発表では、従来の説明では不十分な点を指摘し、当該構文に観察される定性効果の有無を説明するには、目的語名詞句の表わす概念ではなく、構文がどのような文脈で用いられ、どのような解釈を得るのかという語用論的な観点が必要であるということを主張する。さらに、獲得動詞を含む構文の定性効果をも含め、統一的かつ包括的な説明を試みる。あわせて、there (存在) 構文の定性効果との関係についても触れる予定である。

[1] "Weak NP's in HAVE Sentences," *JFAK*, ed. by Jelle Gerbrandy et al., Amsterdam.

「帰結節の未来表現について」

山本五郎 (関西外国語大学)

英語の条件文に関するこれまでの研究では、帰結節の語法について十分な記述がされていないことが多く、文献によって異なった説明がなされることも少なくない。本研究発表では、帰結節における未来表現に注目し will と be going to を取り上げるが、この二つの未来表現においても、その文法性の容認度については、willのみを認め be going to は容認しないという

ものから、限定的にbe going to も容認されるとするものまで様々である。概ね帰結節の未来表現としては、一般的にwillが用いられ、be going to は何らかの条件が整った場合にのみ容認されるという見方がなされているが、その基準は一定ではなく、前提節の時制の指向性を根拠にした分析([1],[2]等)や、発話内効力に着目した分析([3])などが存在する。本発表では、先行研究のデータと記述を踏まえた上で、前提節と帰結節の因果関係に焦点を当て、帰結節の未来表現の語法について体系的な説明の提案を試みるものである。

[1] Quirk et al. "A Comprehensive Grammar of the English Language" [2] Leech. "Meaning and the English Verb" [3] 土家『英語の意味と形式』

司会 大堀壽夫 (東京大学)

“Between the Present Perfect and the Preterite: An Analysis on the “I seen it” Pattern” (E)

Fu Jian Liang
(Kwansei Gakuin University Graduate School)

The purpose of this research is to carry out a holistic analysis on the “I seen it” pattern from evolutionary and semantic perspectives. The analyses on the present perfect clauses without the auxiliary “have” or “has” vary considerably from linguist to linguist (see, for example, Vanneck, 1958 [1]; Trudgill, 1974; Elsness, 1997 [2]; Swam, 2005). In this research it is hypothesized that the “I seen it” pattern is an intermediate grammatical form between the phonetically reduced present perfect form “I’ve seen it” and the preterite form “I saw it.” It is also suggested that the “I seen it” pattern is one of the symbols indicating the evolutionary process of grammaticalization from the present perfect towards the preterite in the English present perfect.

[1] Vanneck, G. (1958) The Colloquial preterite in modern American English. *Word*, 14, 237-242.
[2] Elsness, J. (1997) *The perfect and the preterite in contemporary and Earlier English*. Mouton de Gruyter.

「Chaucer の *treweliche* に見る主観性と読み」

中尾佳行 (広島大学)

Chaucer の言語研究は、近年の文文化・主観化研究(Fischer 2007 [1]等)の発達により、主観的な側面がクローズアップされてきた。この観点から本副詞の主観性の発達を跡付け、その濃淡が「語り」においてどのような読みを許容するか、見直したい。次の *treweliche* は典型である。And *treweliche*,,,, And that hire herte trewe was and kynde /Towardes hym,....*Troilus and Criseyde* 4.1415-8) 語り手は主張への躊躇を示したのか。間(ま)を取って聴衆に注意を喚起したのか。様態副詞から法副詞への発達、法副詞の位置、他の法副詞との比較、法副詞から発話意図・談話標識への発達、読み手の解釈行為への介入等を順次考察する。

[1] Olga Fischer (2007) *Morphosyntactic Change*, Oxford: Oxford University Press.

第七室 (11月14日午前)

司会 滝沢直宏 (名古屋大学)

「*it*-Cleft 構文：意味と談話のインターフェイス」

篠原弘樹 (大阪大学大学院)

本発表は *it*-Cleft 構文の構文的意味(総記と前提)がどう談話に反映され、どういった効果を示すかを考察し、またそのメカニズムにも触れる。

これまで意味論や情報構造の観点で様々な分析がこの構文について行われてきたが、その中心は形式と意味、もしくは形式とその情報構造であったように思える。一方、文体論では、分裂文とは逸脱した構文で修辭的特徴を持つと考えられてきた。この大きく異なる2つの観察を踏まえると、総記と前提を内在させている *it*-Cleft 構文という形式こそが、その意味を談話で反映させ、強制的な解釈を聞き手に与えるという考えが得られる。この点を考慮して分析を行うと、総記と前提が同時に効果的に用いられることはなく、どちらか一方のみが戦略的に使われることがわかる。

また、構文内に有標/無標の違いがあり、有標の場合には解釈を聞き手に委ねることで、より効果的なレトリックを狙っているように考えられる。

[1] Prince (1978) "A Comparison of *Wh-Clefts* and *It-Clefts* in Discourse." [2] Declerck (1988) *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts*.

「空間・時間を定位する前置詞 *at, on, in* の位相構造と認知意味的特性」

松山幹秀 (日本大学)

本発表では、時空間の次元という日常経験世界を英語という言語が前置詞 *at, on, in* によってどのように記号化して捉えているのかを明らかにしようとするものである。

X *prep.* Y の形式において当該3前置詞は Y という定位体を、時空間の認知レベルにおいて異なる次元実体として把握する機能を有している。(Cf. a knock *at* the door, a nameplate *on* the door, a hole *in* the door)

当該前置詞は、物理学的定義としては0次元空間(点)、1次元空間(線)、2次元空間(区域)、3次元空間(立体)、そして時間次元の別を表すが、認知的には12の位相(次元)が区別され、それが3つの前置詞によってカバーされていることを示す。また、次元とはある時空間内でモノを定位する変数と言えるが、変数の多少と比例して前置詞の意義拡張の複雑さが増すこと、最終的にはゼロ・不定・定の3冠詞との共起制限をも踏まえて当該3前置詞の意味的特性の全体像に迫る。

司会 片岡邦好 (愛知大学)

「事物に対する認識の反映としてのメタファー表現」

岩橋一樹 (和歌山大学)

感情を述べるメタファー表現で液体を指す名詞を使うと、他の質量名詞を使う場合より創造性が増す。概念メタファーに基づく、怒りは熱い液体の観点から(Lakoff (1987 [1])), 嬉しさは液体の観点から捉えられる(Kövecses 1991 [2])). しかし、感情を液体に例える表現は感情を他の事物に例える表現と比べてあまり使わ

れず、共起性以外の要因によりこのような表現が使われる。本研究によると、他の質量名詞を用いた表現では事物の知覚的特性が比喩的意味の解釈に関わるが、感情を液体に例えた場合、その流動性が特に比喩的意味の解釈に関わる。また、他の事物の知覚的特性の捉え方と違って液体の流動性の捉え方が文脈によって変わり、それを基に多様な感情が捉えられる。そのうえ、液体が自由に動き、脆弱であることから他の事物を指す語を用いた場合よりも強い感情や具体的な感情が把握される。そのために液体を指す名詞を用いたメタファー表現の創造性が増す。

[1] *Women, Fire, and Dangerous Things*. [2] "Happiness: A Definitional Effort," *Metaphor and Symbolic Activity* 6.

「反復とテキスト構造：文法から詩/散文、そして儀礼/日常行為へ」

小山 亘 (立教大学)

かつてヤコブソンは、範列軸を構成する等価性の原理が、連続性の原理によって構成される連辞軸に投射される「詩的機能」によって、コンテキストから異化された「メッセージ」(テキスト)が構成されること、そして詩的機能によるテキスト化は韻文に顕著に見られるのだが、散文にも同様のテキスト化が、一般に、より緩い程度に観察されることを示した。更にシルヴァスティン (2009 [1]) は、散文や韻文のような「言葉」の領域でのみならず「相互行為」の領域でも詩的機能によるテキスト化という現象が現れており、そのようなテキスト化は、いわゆる儀礼において最も顕著なのだが、日常行為においても、丁度、散文に観察されるような緩い程度のテキスト化 — ゴフマンや会話分析の研究が示すようなテキスト化 — が観察されることを指摘している。本発表では、以上のような言葉/相互行為のテキスト化の理論について解説してゆく。

[1] 『記号の思想：現代言語人類学の一軌

跡—シルヴァスティン論文集—』(小山亘・編) 三元社。

第八室 (11月14日午前)

司会 塩原佳世乃 (文京学院大学)

「英語寄生空所の認可条件について」

坂本暁彦 (筑波大学大学院)

Kim and Lyle (1996 [1])は、寄生空所の認可条件として、真性空所の演算子と寄生空所の演算子の位置が同種であるとする条件 (Homogeneity Condition) を提案した。本発表では、まず、Homogeneity Condition によって捉えることができる寄生空所に関する事実を新たにいくつかあげる。同時に、この条件は寄生空所の認可条件としては不十分であることを、wh 主語構文における寄生空所の生起に関する事実を観ながら指摘し、真性空所の連鎖と寄生空所の連鎖が同種であることが実際の認可条件であると主張する。さらに、この条件の方が、寄生空所の認可条件として伝統的に仮定されてきた Anti-c-command Condition (cf. Engdahl (1983 [2])) よりも経験的に妥当であることも示し、一般原理への還元可能性についても触れることにする。

[1] “Parasitic Gaps, Multiple Questions, and VP Ellipsis,” *WCCFL* 14, 287-301. [2] “Parasitic Gaps,” *Linguistics and Philosophy* 6, 5-34.

「英語における名詞句からの外置：下位コピーの具現化と焦点解釈」

三上 傑 (筑波大学大学院/日本学術振興会特別研究員)

「名詞句からの外置 (ExNP)」の派生に関して、田中 (2009[1])は、PF 削除に基づいて分析するのでは経験的な問題が生じるとして、右方移動を仮定する説明を試みている。本発表では、この右方移動分析の理論的・経験的な問題点を指摘した上で、新たに基底生成分析を提案する。

具体的には、名詞の補部として機能する PP の ExNP は、Takano (1998[2])の重名詞句転移の分析を援用し、名詞句内で焦点として機能

する PP 部分の下位コピーが PF で具現することで派生するのに対し、付加部として機能する PP の ExNP は、Spell-out の際に Late Merge を介して CP と v^*P に直接付加することで派生すると主張する (cf. Lebeaux (1988[3])). さらに、本発表が仮定した下位コピーの具現化は、英語の場所句倒置構文の派生でも見られることを指摘し、この現象が、「焦点」解釈と関連付けられる、英語の「文体的倒置構文」全般で観察されるものであると主張する。

[1] 「フェイズ理論における名詞句からの外置構文の派生について」 [2] “Object Shift and Scrambling” [3] *Language Acquisition and the Form of Grammar*

司会 内堀朝子 (日本大学)

「素性継承と主要部移動」

中村太一 (東北大学大学院)

本発表では、Chomsky (2008 [1]) のフェーズ・モデルにおいて重要な仕組みである素性継承が主要部移動に対して持つ帰結について議論する。Chomsky (2001 [2]) 等で指摘されるように、主要部移動が音韻部門の操作であると主張される根拠の一つに、主要部移動が非循環的に適用され拡張条件に違反する問題がある。この問題に対し、素性継承の仕組みが、一見したところ非循環的な Spec-T への外項の移動を可能にするだけでなく、非循環的な主要部移動をも可能にすることを指摘し、主要部移動が、句の移動と同様に、統語操作であると主張する。この主張により、主要部移動が関わるとされてきた V-to-C 移動現象等について、素性継承の仕組みに基づいた統語的説明が与えられることを示す。さらに、主要部移動の適用に見られる「先読み」の問題や主要部移動を駆動する素性についても言及し、素性継承の観点からの考察を行いたい。

[1] “On Phases” [2] “Derivation by Phase”

“Numeral Classifier and Extended Nominal Projections”

Masao Ochi (Osaka University)

This presentation explores a non-uniform analysis of prenominal and postnominal numeral

classifiers (NC) in Japanese, drawing on insights from previous literature, especially [1] and [2]. The prenominal NC is analyzed as an adnominal adjunct whereas the postnominal NC is regarded as a head taking the nominal complement. I support this line of analysis by discussing asymmetries between the two types of NCs that would naturally follow from it. Several theoretical points will emerge in the course of the discussion, including the optional presence of an abstract nominal functional projection in this language, and the syntactic encoding of specificity (see [3] and [4]). It is also argued the floating/stranded NC and the postnominal NC essentially share the same underlying structure, although they crucially come from slightly different numerations.

[1] Saito et al. (2008) *JEAL* 17 [2] Watanabe (2006) *NLLT* 24 [3] Borer (2005) *In Name Only*, OUP [4] Muromatsu (1998) University of Maryland dissertation

第九室 (11月14日午前)

司会 菊地 朗 (東北大学)

「結果構文と Body Part Off 構文が表す事象の並行性」

工藤 俊 (筑波大学大学院)

本発表は、「～程」という程度解釈が可能な結果構文(e.g. Mary cried her eyes red)と Body Part Off 構文(e.g. He talked his head off)を比較考察する。まず、両構文に関する先行研究として、Jackendoff (1997[1])と Sawada (2000[2])を概観する。前者は両構文間に直接的な関係はないとし、後者は Body Part Off 構文が表す事象を捉える認知プロセスを提案している。

本発表では、これらの先行研究の不備を指摘する形で、「両構文が表す事象は並行的であり、それは Action Chain (AC)とそれに適用される認知プロセスを仮定することで捉えられる」ということを提案する。具体的には、両構文は<行為> CAUSE <変化> → <結果状態>という AC を有し、さらに<結果状態>が背景化されることで程度解釈が生まれる。このようなプロセスを仮定することにより、両構

文が表す事象を同列に扱うことができることを、実例を交えながら実証する。

[1] “Twistin’ the Night Away,” *Language* 73, 534-559. [2] “The Semantics of the ‘Body Part Off’ Construction,” *EL* 17:2, 361-385.

「V the hell out of 構文とイディオム性」

吉川裕介 (佛教大学)

五十嵐海理 (龍谷大学)

英語では(1)が示すように、目的語位置に the hell が生起し、その後前置詞 out of + 人目的語をとることができ、これを V the hell out of 構文と呼ぶ。例えば、(1a)では、動詞と意味上の目的語 me の間に the hell out of が現れることにより、「メアリーは私をこてんぱんに叩きのめした」という一種の強意表現として解釈される。さらに、この構文では the hell を省略すると不適格となることから、直接目的語位置の the hell は動詞から認可されない要素であると言える。

(1) a. She beat the hell out of me.

b. She scared the hell out of me.

本発表では、V the hell out of 構文が、構文を構成する各要素から語義的に算出されているのか、それとも一種の構文イディオムとして統語的に構成されているのかという構文の構成性の問題や、字義的な解釈から誇張読みが導き出される要因を、幾つかの意味的・統語的テストや大規模コーパス、実例などを基に実証的に明らかにする。

[1] Espinal, M. T and J. Mateu (2010) “On classes of idioms and their interpretation,” *Journal of Pragmatics* 42. [2] Jackendoff, R. (1997) *The Architecture of the Language Faculty*.

司会 中谷健太郎 (甲南大学)

「主体変化表現としての英語の変項名詞句」

清水康樹 (東北大学大学院)

本発表では、As the search in the city proceeds, the number of casualties will get larger. のような、値の変化を表す文は主体変化表現を成すと主張する。西山(2003[1])に基づくと、上例の下線部は how many casualties there are という WH 疑問文に対応する変項名詞句であり、変

項の値が入れ替わる解釈が与えられる。上例は *though the number doesn't actually change* という後続節と矛盾せず、実際の変化でなく観察者主体の主観的な変化を表すことができる。深田・仲本(2008[2])は、*This road {winds/is winding} through the mountains.* という主体変化表現のアスペクトの違いは心的スキヤニングの方法の違いによると言う。一括的スキヤニングでなく連続的スキヤニングが進行形に反映されるこの文の特徴は、値の変化を表す文にも当てはまることが示される。

[1]『日本語名詞句の意味論と語用論』[2]『概念化と意味の世界』

「英語結果構文の固有性と類型的特性」

小野尚之 (東北大学)

結果構文と移動構文の間には通言語的な平行性があることが一般に想定されている。この平行性は Talmy の言語類型、すなわち動詞フレーム言語 vs. サテライトフレーム言語の二分法を強く支持する証拠と考えられる。しかし、詳細に見ると、それぞれの構文は固有の特性を具えており、一般に考えられているほど完全な平行性を示すわけではない。本研究は、そのような観点から英語結果構文の固有性と類型的特性を明確にすることによって、Talmy の言語類型は、言語そのもののタイプというよりは、言語に含まれる諸々の語彙的リソースによる複合的な効果であるという見方 (a lexical resource view) を提案する。この考え方によれば、動詞フレームとサテライトフレームの違いはストラテジーの違いであり、適切な語彙リソースがあればどの言語においても実現可能である。通言語的なデータの分析を通して、このことが正しいことを示したい。

第十室 (11月14日午前)

司会 上田由紀子 (秋田大学)

“Reconsidering Subject Raising in Japanese”

Hironobu Kasai (The University of Kitakyushu)

The aim of this presentation is to address the question of whether subjects raise to [Spec, TP] or

remain in-situ in Japanese, which is one of the controversial issues in Japanese syntax (Fukui (1986), Kuroda (1988), Miyagawa (2001) and Kishimoto (2001), among others). Closely examining various properties of apparent subject raising in the language, studied by Uchibori (2001 [1]) and Uchibori and Takahashi (2003), I argue that Japanese subjects remain in-situ, contrary to them. I also reconsider Kishimoto's (2001) influential argument based on indeterminate pronouns. The absence of subject raising in Japanese follows if Japanese lacks the EPP requirement, contrary to Miyagawa (2001). This presentation lends support to the claim that the EPP requirement on T is not universal but should be parametrized, which is recently argued by Bobaljik and Wurmbrand (2005) on independent grounds.

[1] Uchibori, Asako (2001) Raising out of CP and C-T Relations. *MIT Working Papers in Linguistics* 41.

“NP Deletion in English and Japanese” (E)

Hideki Maki (Gifu University)

and Fumikazu Niinuma (Morioka University)

Lobeck (1990 [1]) and Saito and Murasugi (1990 [2]) propose that deletion of a constituent is possible only when that constituent is a complement of a functional head (D, I, C) that is in agreement with the element in its SPEC. In this paper, we point out, focusing on NP deletion, that pronouns and one of the wh-words in English do not pattern like proper names, and suggest that they do not actually occupy in DP SPEC, but in D. We then turn to the Japanese counterparts, and show that one of the wh-words in Japanese also does not pattern like proper names, suggesting that it is not in DP SPEC or D, either. We then discuss what these findings will suggest for the theory of grammar.

[1] Lobeck, A. 1990. “Functional Heads as Proper Governors,” *NELS* 20, 348-362. [2] Saito, M. and K. Murasugi. 1990. “N^o-Deletion in Japanese: A Preliminary Study.” *Japanese/Korean Linguistics* 1, 285-301.

“Multiple Spell-Out and Extraction from Merged Elements”

江本博昭 (東北大学大学院)

Chomsky (2005 [1])では、主語からの抜き出しの可否に関して他動詞の場合と非対格・受動動詞で対比があることを指摘した上で、これは、すでに派生を終えた下位のフェイズに埋め込まれた要素の抜き出しを禁止する局所性条件(Locality Condition)によって説明されると主張している。しかしながら、なぜフェイズのエッジ内部への操作が適用できないのかが明確ではない。

そこで本稿では、PF への計算の橋渡しを単純化するフェイズ不可侵条件(PIC)に加えて、それと独立した PF の条件として、語順決定を最適化する Multiple Spell-Out (Uriagereka (1999 [2]))も考慮する必要があると主張する。

この主張により、主語からの抜き出しを含む、外的併合により併合された要素からの抜き出しの可否、および内的併合により移動した要素が示す凍結効果が説明されることを示す。

[1] “On Phases” [2] “Multiple Spell-Out” in *Working Minimalism*, MIT Press.

「CHILDES に基づいた Nina と Adam の *where*-疑問文の発達」

深谷修代 (津田塾大学)

CHILDES を用いて Nina と Adam の *where*-疑問文を縦断的に分析し、習得過程に顕著な違いがあることを明らかにする。Nina と Adam のファイルの中から、*where* を含む疑問文をグレップ検索し、10 のグループに分類した。Nina では初期から *where's-S?* が観察された。また、*be* 動詞を伴う疑問文(418 例)のうち、412 例が連結 *be* 動詞だった。Adam では、*where V?*、*where S V?* の動詞を伴う疑問文や *where S?* が初期から観察された。さらに、*be* 動詞が初出した 2;7 以前に限定すると、206 例中 132 例で動詞の原形を伴い、そのうち 128 例で *go* が用いられていた。この違いを解明するため、同ファイルの母親の発話を Nina と Adam の初期に限定して分析した。Nina の母

親で *be* 動詞を含む *where* 疑問文のうち、連結 *be* 動詞は 133 例中 125 例だった。Adam の母親では、106 例中 78 例で動詞を伴い、そのうち *go* が 38 例で用いられていた。また、Adam の初期では観察されなかった *where's S?* は Adam の母親からも観察されなかった。以上より、子供の発話は、母親の影響を受けると結論付けることができる。

[1] MacWhinney, Brain (2000) *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk*, Lawrence Erlbaum Associates, Mahwah, NJ.

〈シンポジウム〉

A 室 (11 月 13 日午後)

「英語学ってどんなことするの?—英語学について知ろう!—」

司会 大津由紀雄 (慶應義塾大学)

英語学とは英語を対象とした言語学のことですが、現代英語学はじつに多様な研究を内包しています。英語学って一体何なんだろう? 大学で英語学を学んでみようかと考えている高校生、英語学を専攻しようか迷っている大学生、自分の研究領域以外のところでどんな研究が行われているのか知りたいと思っている大学院生、学生時代、英語学は学んだけれど、英語を教えているいまこそ、もう一度、英語学について考えてみたいと思っている先生がた、英語学ってどんな学問なのか知りたいと思っている社会人の方々、など広い範囲の聴衆を対象に 3 人の研究者がそれぞれの研究領域のセールスマンとなってみなさんに語りかけます。

登壇予定順に、伊藤たかねさんは理論言語学と脳科学の接点、石川慎一郎さんはコーパス言語学、岡田伸夫さんは英語学と英語教育の接点について語ります。

登壇者と参加者のやりとりの時間も確保します。みなさん、ぜひご参加下さい。

「生成文法と脳科学—形態論の事例から」

講師 伊藤たかね (東京大学)

生成文法は、言語学を認知科学の下位分野と位置づけている。ことばの本質を知ることにはヒトの心の働きを知る最良の手がかりとなるからである。心の働きを司っているのが脳であるなら、言語学研究と脳科学研究には必然的な関係があることになるが、実際に言語研究と脳科学が活発に協働を始めたのはこの四半世紀ほどのことである。

この発表では、言語事実の精査だけでは結論の出せない理論的対立に、脳科学的な研究の結果から答えを出すことができるような事例を通して、言語研究と脳科学研究の協働の成果を紹介したい。具体的には、英語の過去形形成に関わる論争[1]と日本語の名詞化接辞についての研究[2]を取り上げ、語レベルでの言語処理に「記憶」と「演算」という性質の異なる心内メカニズムが関与し、それらが異なる脳内メカニズムに支えられていることを示唆する様々な実験結果を検討する。

[1] S. Pinker & M. T. Ullman (2002) "The Past and Future of the Past Tense," *Trends Cog. Sci.* 6, 456-463. [2] 伊藤・杉岡(2002)『語の仕組みと語形成』研究社

「ことばを教える：コーパスに基づく英語研究の可能性」

講師 石川慎一郎 (神戸大学)

「英語学」にはさまざまな研究アプローチが存在しますが、本発表では、コーパスに基づく英語研究の概要を紹介します。

コーパス言語学では、大量の言語データを解析し、言語現象を主として数量的に捉えることで、言語に隠された傾向性やパタンの解明を目指します。従来の文法は「言えること」と「言えないこと」の境界を問題にしてきましたが、コーパス言語学の関心は、むしろ、「言えること」と「実際に言われること」の違いに向けられます。

コーパス研究の蓄積が進むにつれ、両者の間には高い垣根が存在し、言語というものが予想以上に制約的で自由度の少ないものであることがわかってきました。

当日はこうした知見の一部を示し、コーパ

スを用いた言語記述の意義や、言語教育への応用可能性について論じたいと思います。

「英文法研究の英語教育への三つの貢献」

講師 岡田伸夫 (大阪大学)

本発表では、英文法研究が英語教育に対してどのような貢献をすることができるかについて具体例をあげて考察する。

第一の貢献の仕方は、新しい文法事実や、ばらばらの事実を統括する見通しのよい説明法を提供することである。現行の教育/学習英文法に含まれる裏づけのない「事実」や、実態を捉えていない文法用語や、的外れの「説明」は、適宜、正していかなければならない。

第二の貢献の仕方は、「意味のある」文法指導の再構築である。現行の文法指導は、表面的な形式にこだわり、意味を軽視しがちである。構文を適切な場面で使うには、まず、その意味を正確に知らなければならない。

日本語と異なる英語を学習するのは容易ではないが、躓くときは、英語や日本語について考える好機でもある。英文法研究の英語教育への第三の貢献の仕方は、英文法の研究成果を活用して、学習者が言語に対する理解を深める手助けをすることである。

岡田伸夫(2008)「学習英文法の内容と指導法の改善」木村健治・金崎春幸(編)『言語文化への招待』177-190, 大阪大学出版会。

B室 (11月14日午後)

「文法研究資料としてのコーパスデータの批判的検討」

司会 大名 力 (名古屋大学)

特別な訓練を経ずともコーパスが利用できる“ユーザーフレンドリーな”環境の普及は、言語研究分野におけるコーパスの利用の拡大、研究の促進に寄与してきたが、同時に、様々なレベルで“ブラックボックス化”が進む一因ともなっており、使用するコーパスの種類・規模、処理内容、手法・方法論の妥当性の検討の必要性が意識されにくい状況をも生み出している。このような状況に鑑み、本シンポジウムでは、研究資料としてのコーパスデータに焦点を当て、語法文法研究を中心に、

統語論・構文研究、辞書学、言語習得研究、言い誤り研究の観点から、各分野で利用されるコーパスの特質、利用の現状と、コーパスデータの利点と問題点を検討し、今後の展望について考えたい。

「コーパスから得やすい情報、得にくい情報 —統語論、構文研究を中心に—」

講師 大名 力 (名古屋大学)

本発表では、主として統語論、構文研究の観点から、コーパスデータの性質、問題点について考えてみたい。基本的にコーパスからは否定証拠は得られず、主として肯定証拠を基に仮説の検証が行えるものの方が必要なデータを集めやすい。また、一般的に、コーパスからは、要素の異同と線形順序から機械的操作により得られる情報に基づき抽出可能な言語現象についてはデータが得やすいが、(終端連鎖の線形順序以外の) 統語情報、意味情報、語用論的情報などは、利用が困難か不可能な場合が多く、無形の要素や局所化できない意味を含む例の検索も難しい。このように、対象となる言語現象によりコーパスからのデータの得やすさも異なることを、具体例を挙げながら示す。最後に、より広い観点から、文法・発話・内省・実験・コーパスなどの関係を整理して提示し、他の講師の発表への橋渡しとしたい。

「辞書編集におけるコーパス活用 —意味・用法の同定をめぐる—」

講師 井上永幸 (広島大学)

辞書編集においては、すべての見出し・語義項目について、その有用度や規範的・記述的立場に応じて情報がバランスよく与えられることが期待されている。情報収集の際、先行研究にのみ頼ってしまうと、集まった資料の濃淡によって、提供できる情報にも偏りが生じることが懸念される。コーパスが普及し、非母語話者でも独自の言語分析を行うことが可能になり、先行研究、特に英米の辞書・参考書・論文などに頼った執筆から解放されたかに見えるが、辞書編集の限られた時間内では、コーパスを適切かつ最大限に活用するためには、いくつかの問題点も存在する。使用するコ

ーパスの内容がそもそも辞典編集に適したものであるかといった代表性をめぐる問題や、希望の形を検索できたとしてもそこから意味・用法の同定をどのように処理してゆくのかといった問題がそれである。本発表では、特に後者に焦点を当て、具体例をあげながら、対処法の提示を試みたい。

[1] 大名力 (2010) 「コーパス検索で注意すべきこと—基礎データの信頼性向上のため—」、英語コーパス学会第35回大会、講演資料。

「生成文法理論に基づく言語獲得研究と 幼児発話コーパス—現状と展望—」

講師 杉崎鉦司 (三重大学)

生成文法理論では、言語獲得は、言語経験と普遍文法(UG)との相互作用によって達成されると仮定されている。生成文法理論に基づく言語獲得研究は、この仮説に基づき、理論研究から出されたUGの「原理」および「パラメータ」に関する個々の提案に関して、現実の言語獲得過程からその存在を裏付ける証拠を提示するという試みを中心的に行うことで、発展を遂げてきた。しかし、これまでの研究を振り返ると、「原理」の存在を支持する事実は主に実験研究から得られており、一方、「パラメータ」の存在を支持する事実は主に幼児発話コーパス (特に CHILDES) の分析から得られている。本発表では、このような研究方法の違いが存在するのはなぜかを明らかにするとともに、幼児発話コーパスを用いたパラメータ研究はどのような仮説の上に成り立っているのか、これまでどのような成果を上げ、どのような課題を抱えているのかを議論し、今後の展望を探る。

「言語的逸脱事例コーパスの貢献と課題 —言い間違い研究を中心に—」

講師 寺尾 康 (静岡県立大学)

自然発話で観察された言い間違いなどを集めた言語逸脱コーパスは、規模は小さいながら個々の事例が持つ稀少性と情報の豊かさゆえに注目を集めている。本発表では、まず言語産出研究において言い間違い資料が果たした重要な役割を、分類・分析の方法と議論の

方法（「X という誤りはない」という no errors の観点、「X という誤りが存在する」という some errors の観点、「X という誤りは Y という誤りよりも頻度が高い」という more errors の観点）から明らかにする。

同時に、避けて通れない問題点として収集における信頼性の確保と分析の際の解釈のゆれを指摘し、改善方法を探る。

最後に言語習得研究への応用（習得途上の誤りと成人母語話者の誤りの比較）や認知科学への貢献（自然言語生成モデルの検証用データの提供）といった言語逸脱データの持つ将来性も視野に入れたい。

C室（11月14日午後）

「文献学と言語理論の接点を求めて」

司会 小倉美知子（千葉大学）

文献学と言語理論とは、アプローチの方向性の違いから対立することが当然のように言われてきたが、1990年 Helsinki Corpus の運用開始以来、Matti Rissanen を中心として2つの学問的立場の融合が提唱されるようになった。それから20年、果たして融合は成ったのか。国外の歴史英語学会（ICEHL）等では、方言学や辞書学など、理論から出発するのではない領域も個人ないし共同で研究されており、2つの立場の対立は必ずしも目立つものではなくなくなってきており、日本英語学会の大会や学会誌においても、文献学の成果や電子コーパスの調査を取り入れた理論的な研究結果が報告されている。今回のシンポジウムでは特に語順をめぐる問題に焦点を当て、文献学の立場と言語理論の立場をとる講師各2人によって議論し、それぞれのアプローチの違いを明らかにすると同時に、両者の接点を探ることで、史的事実のよりの確な解説の仕方を見出したい。

「古英語散文における動詞と目的語の語順の一側面」

講師 小塚良孝（愛知教育大学）

古英語散文における動詞の目的語の位置は、それほど自由ではなく、目的語の種類（名詞・代名詞）や重さ、節の種類、動詞の形態、情

報構造など、様々な要因の影響を受けることがこれまでの研究で明らかにされている（e.g. Kohonen (1978[1]), Mitchell (1985[2])). しかし、その一方で、あまり注目されないが、定形句のごとく繰り返し同じ語順で現れるコロケーションもある。本発表では、この種の表現に焦点を当て、古英語の語順を考える。特に、古英語訳福音書 *West Saxon Gospels* や古英語期の年代記 *Anglo-Saxon Chronicle* などに見られる語順の定形性が高いコロケーションを取り上げ、その特徴を示す。また、古英語の語順研究におけるこの種の表現の扱いの重要性も論じる。

[1] *On the Development of English Word Order in Religious Prose around 1000 and 1200 A.D.* (Åbo: Åbo Akademi) [2] *Old English Syntax*. (Oxford: Clarendon Press).

「英語名詞句の発達」

講師 大沢ふよう（法政大学）

英語の名詞句の史的には、名詞句内にもどのような要素を設定するのか、それらの要素の語順、DPの存在を古英語に認めるのか、古い時代には見られなかった名詞句構造（たとえば、群属格構造）が何故可能になったのか、などをめぐって有力な先行研究が幾つか存在する。

問題を難しくしているのは、名詞句内部に複数の名詞が存在する場合の格付与、あるいは格照合の問題である。これに関しては現代英語における理論的分析においても、様々な提案がなされてきた。本発表では、幾つかの先行研究にも言及しながら、機能範疇DPが名詞句の中で創発してくる過程を、属格が果たした役割に注目しつつ明らかにする。古い時代の名詞句内の、特に属格を含む名詞句の様々な語順に言及し、古英語の時代にDPが存在しないこと、DPが創発してくることで、英語の名詞句に何が起こったのかを検証する。そして、名詞句の発達の背後にある大きな言語変化についても検証する。

[1] Allen, C. (2008) *Genitives in Early English*, Oxford. [2] Osawa, F. (2009) “The Emergence of DP in the History of English: The Role of the Mysterious Genitive,” Benjamins.

「非人称・再帰・人称構文を同時に持ちうる動詞」

講師 小倉美知子(千葉大学)

非人称構文の場合、人の与格(ないし対格、稀に属格)が存在することが、人称構文への史的発達には不可欠である([1])。再帰構文の場合、主語と同一指示性を持つ与格・対格・属格が、理論上はすべての動詞に現われ得る([2])。ほとんどの非人称動詞と呼ばれる動詞が古英語の段階ですでに物を主語にした構文を持ち、時には人を主語にした構文を持っていたことが知られている。そうした場合、これらの構文の共起は何を意味するのか。今回の発表では、すでに従来の研究で明らかにされている非人称の人称化、再帰性は無いが同一指示性を示す代名詞の存在、人称代名詞の主格と与格との語順等について言及したのち、非人称・再帰・人称構文のすべてを同時に持ち得る動詞の例を通じて、それらの意味的・文体的相違を探り、使用時期・方言・頻度等の要素の重要性を指摘する。

[1] W. van der Gaaf, *The Transition from the Impersonal to the Personal Construction* (Heidelberg, 1904). [2] Michiko Ogura, “‘Reflexive’ and ‘Impersonal’ Constructions in Medieval English”, *Anglia* 121.4 (2003).

「不定詞節における目的語の分布について」

講師 田中智之(名古屋大学)

不定詞節における語順に関する興味深い事実として、定形節の場合とは異なり、目的語の種類に関わらず「目的語・動詞」語順が初期近代英語まで存続していたことが挙げられる(Moerenhout and Wurff (2005[1])). さらに、不定詞節の目的語が母型節に現れる、いわゆる再構成(restructuring)の現象が初期近代英語まで観察される。本発表では、不定詞節における目的語の分布の歴史の変遷について、電子コーパスを用いて独自の調査を行うとともに、最近の生成文法理論の枠組みにおいて説明を試みる。特に、上記の語順の消失が「目的語・動詞」基底語順の消失のみならず、不定詞節における機能範疇の出現(Tanaka (2007 [2])), PRO 主語の導入、および不定詞節のフェイズとしての確立と密接な関係があること

を主張する。

[1] “Object-Verb Order in Early Sixteenth-Century Prose: An Exploratory Study,” *ELL* 9. [2] “The Rise of Lexical Subjects in English Infinitives,” *JCGL* 10.

D室(11月14日午後)

「Measurementの諸相」

司会 渡辺 明(東京大学)

様々な量の数値化に関わる表現は、言語間でどの程度共通性を示すのであろうか。数詞のみを対象とする単純なレベル([1],[2]参照)から離れ、その他の程度表現や配分的量化との関連といった領域に入ると、問題は混沌としてくる。言語間の違いが存在するとなれば、当然、どのようなパラメータでそれをとらえればよいか明らかにならなければならない。さらに、パラメータの値の違いがどのように習得されるのか、という課題も忘れてはならない。統語的には機能範疇の役割がカギとなるが、同時に、意味解釈の問題も避けて通ることはできない。本シンポジウムではこれらの問題にあらたな光を当てることを目指す。

[1] Watanabe (2009) “Measure Phrases in PP,” *TCP* 10, Hituji Sybo. [2] Watanabe (2010) “Vague Quantity, Numerals, and Natural Numbers,” *Syntax* 13.

“The Syntax of the Comparative Complement and Its Implications for the Semantics of the Degree Operator”

講師 Shoichi Takahashi (Nihon University)

On the basis of scope and binding facts, I demonstrate that there is cross-linguistic variation in the available structures of the comparative complement (i.e., a constituent in the complement of a comparative particle like *than* in English). In some languages, which include English, the comparative complement involves a clausal structure at LF in both clausal comparatives (e.g., *John is taller than Bill is*) and phrasal comparatives (e.g., *John is taller than Bill*). In other languages like Hindi-Urdu, a clausal structure cannot be postulated for the comparative

complement. I argue that this cross-linguistic variation results from the interaction of morphosyntactic properties of the comparative particle and other properties of grammar. I also discuss implications of the cross-linguistic variation for the meaning of a degree operator (e.g., *-er* in English).

**“Measurement in *Too many/much*, *-Sugiru*,
and Related Constructions”**

講師 Kimiko Nakanishi
(Ochanomizu University)

It has been claimed that constructions expressing measurement are not without restrictions ([1], [2]). This talk corroborates the claim by examining the semantics of English *too* construction (*Joe read {three too many books / three books too many}*) and of Japanese *-sugiru* construction (e.g. *Joe-ga {san-satu-no hon-o / hon-o san-satu} yomi-sugi-ta*). First, I show that these constructions are subject to different semantic restrictions, and that the difference follows from the difference in the domains of measurement: while the *too* construction involves the nominal measurement, the *-sugiru* construction involves the verbal measurement. Then I demonstrate that the difference in the domains of measurement is useful in explaining the semantics of related constructions such as comparatives (*Joe read the book more than Sam* vs. *Joe-ga Sam-yori hon-o yon-da*) and resultatives (*Joe painted the wall white* vs. *Joe-ga kabe-o siroku nut-ta*).

[1] Schwarzschild, R. (2006) “The role of dimensions in the syntax of noun phrases,” *Syntax* 9. [2] Nakanishi, K. (2007) “Measurement in the nominal and verbal domains,” *Linguistics and Philosophy* 30.

**“On Numeral Quantifiers with a Distributive
Marker”**

講師 Yoichi Miyamoto (Osaka University)

Miyamoto (2009 [2]) examines a type of distributive interpretation in Japanese available only in sentences containing a numeral quantifier (NQ) with the distributive affix *zutsu* in a

pre-nominal position [1]. The sentence *Hanako-ga ni-hon-zutsu-no enpitsu-o katta*, for example, can mean that Hanako bought the pencils in twos. This presentation investigates the syntactic properties of NQs with *zutsu* further, and their counterparts in languages other than Japanese. I aim to derive cross-linguistic differences including the availability of this distributive interpretation from whether the language has an option of the distributive marker taking the event argument as its R(ange)NP, in addition to different properties of NQs.

[1] Gil, D. (1987) “Definiteness, Noun Phrase Configurationality, and the Count-Mass Distinction,” *The Representation of (In) definiteness*, MIT Press. [2] Miyamoto, Y. (2009) “On the Nominal-Internal Distributive Interpretation in Japanese” *JEAL* 18.

E室 (11月14日午後)

**“Cross-cultural Perspectives on Deictic Field
— Linguistic, Cultural and Social Perspectives
on Language Practices ” (E)**

Chair: Nobuhiro Furuyama
(National Institute of Informatics)

The purpose of the symposium is to highlight how demonstrative expressions including gestures dynamically create meanings, and are construed on the basis of the deictic field of interaction, and how they vary depending on each situation and culture. We would like to present the phenomena illustrating the language practices of several different languages such as English, Japanese, and Lao, by which the universality and diversity will be illuminated.

**“Sources of Asymmetry in Human Interaction:
The Effects of Time, Knowledge, and Agency in
a Common Deictic Field”**

Lecturer: Nick Enfield
(Max Planck Institute for Psycholinguistics)

A deictic center is grounded at an individual point, and yet communication involves at least two such centers together in a shared field. A constant

tension in human interaction is the asymmetry among these co-existing deictic centers. As interlocutors, whether we are competing with each other or pursuing common goals, we strive to find alignment, and for this we must contend with a set of constant forces that cause asymmetries to persist between people in communicative contexts. In this talk, I will discuss three major sources of asymmetry among interlocutors: 1. the flow of time, which makes all communicative moves both subsequent to some moves and prior to others, 2. differences between people's knowledge and other kinds of access to referential domains, and 3. the distributed nature of agency across interlocutors.

“A Quest for the Deictic Field in the Use of the Japanese Right/Left, Front/Back”

Lecturer: Kyoko Inoue (Keio University)

This presentation explores what motivates the switch from the absolute frame of reference such as “east/west/south/north and up/down” to the “right/left” relative frame of reference while analyzing the deictic field among the Japanese. Based on my previous study [1] that strongly indicated the impact of geographic scale on the choice of spatial frames of reference, the discourse ranging from the wide scale urban planning to more local, human-centered scale of home designing will be analyzed. The switch of frames from visually present spatial “front/back” to invisible temporal “front/back” [2] will also be examined for the purpose of inquiring the role visibility plays in the deictic field.

[1] Inoue, K. (2005) “Spatial Cognition and Communication” in Ide & Hiraga (eds.) *Cross-Culture and Communication*, Hitsuji Shobo.
[2] Lakoff, G. (1993) “The Contemporary Theory of Metaphor,” in Ortony (ed.) *Metaphor and Thought*, Cambridge.

“Japanese Demonstratives and Socio-cultural Context in Language Practices”

Lecturer: Keiko Naruoka (Toyo University)

This paper shows that the Japanese demonstrative system embeds the elements of

socio-cultural context which is crucial in Japanese interaction. It examines the uses of various Japanese demonstratives in interaction, and illustrates that these forms are chosen to index the following socio-cultural meanings: (1) formality of the situation, (2) interpersonal relationship between the speaker, addressee, and/or referent, (3) speaker's gender, and (4) emotion or attitude toward the referent and/or addressee. Hanks (1996 [1]) claims that the context which is required to understand deictics is not a purely natural one but a socio-cultural one, determined by the native speakers' values, perspectives, and routine practices. This paper supports Hanks' claim and argues the socio-cultural meanings expressed by Japanese demonstratives correspond to the meanings indexed by other linguistic features distinctive to Japanese, such as honorifics, sentence-final particles, personal references, and other modality expressions.

[1] Hanks, W. (1996) “Language Form and Communicative Practices,” *Rethinking Linguistic Relativity*, CUP.

“Fluctuation in Verbal and Gestural Expression when the Gestural Viewpoints are Recalibrated”

Lecturer: Nobuhiro Furuyama
(National Institute of Informatics)

This talk describes a study on cartoon narratives by native speakers of Japanese, focusing on a certain type of fluctuations or disfluency in gesture we call “microslips,” after Ed Reed's study on them in instrumental actions. We have already shown elsewhere that the listener location and complexity of speech content are factors contributing to the occurrence of microslips on gesture. The present study addresses the question whether shifts of gestural viewpoints (observer viewpoint and character viewpoint) from one type to the other have any impact on distribution of microslips on gesture. In the presentation, we will report on the results of our analyses and discuss their implications to speech-gesture study in particular and pragmatics in general.

